平和な世界をつくる

那覇市立首里中学校三年　多和田　真央

「戦争は怖い。だから絶対にくり返してはならない。」

授業をするたびに書きつらねる言葉。私たちは本当に戦争をくり返さないためにできることを、この小さな手で行うことができているのだろうか。

私は小学校一年生のとき、初めて戦争の恐ろしさを知った。図書館の前に貼られていた写真に思わず足が止まった。いたるところで爆発が起きている街。壕の入り口に向けられた火炎放射器。モノクロの世界に映る情景に、私は目を見張った。街がここまでひどい状態になるものなのかと思い、驚きのあまり言葉が出てこなかった。

私の祖父は戦争体験者だった。祖父は月桃の花を見つけると、いつも少し悲しそうな顔をする。そして決まって

「おじぃはねぇ、兵隊さんに助けられたんだよ。北部の方に行かなかったら、おじぃはここにはいなかった。小さないもを探すために危険に冒したりしたさ。もう、おじぃはあんな思いをしたくない。」

と教えてくれる。私はもっとその話を詳しく聞きたかったが、何も言うことができなかった。おじぃはどんなにつらい思いをしたのだろう。食べるものも十分になく、いつもお腹をすかし、泣き叫ぶこともできない。家族や友人を失うかもしれない恐怖。いつも、死が身近にある日々。毎日美味しいごはんを食べて、当たり前のように学校へ行って勉強をする。そんな日々を過ごしている私には、想像することすらできなかった。そして、「戦争は怖いけど、これからは平和な世界が続いていくのだから大丈夫」と考えていた。

それではダメなのだと気づいたのは、中学二年生のときだ。

「みんなどうして戦争が起きると思う？」

塾の先生が問いかける。周りの生徒は

「植民地がほしいから！」

「資源がほしいから！」

と口をそろえて言う。先生は、どの言葉にも首を横に振った。そして真剣な眼差しで

「戦争が一番、儲かるからだ。」

と言った。私はその言葉に衝撃を受けた。今まで学んだ戦争の恐ろしさや命の尊さを考えると悔しさが込み上げてきた。「どうして国の繁栄のために国民が命を失わなければならないのだ」と強い想いを抱き「戦争は何があってもしてはいけないのだ」と改めて思った。

さらにそれを実感したのは、ウクライナとロシアの戦争の状況を説明するニュースが目に映ったときだ。建物が崩壊している様子や避難してきた人々の話を聞いて胸が痛んだ。私よりも幼い子供が、泣きながら一人で歩いている。本当にこれは現実の世界の話なのか。フィクションなのではないかと疑うほどだった。また、沖縄戦のような悲惨なできごとがくり返されていく。見ているだけで何もできない。自分の無力さを実感したときだった。そこで私はあることに気がついた。今まで、私は本当に自分ができることをしてきただろうか。どこかで「自分に戦争は関係ない」と思っていたのではないか。幼い頃から話を聞き、すべてを分かりきったような気でいた沖縄戦。その存在は想像を絶するほど遠い。だからこそ、私たちはウクライナの戦争を通して、もう一度戦争についてよく知り、考える必要がある。

戦後七十七年、戦争を体験した方が減少し私たちはリアルな語りを聞く機会が少なくなった。戦争を体験したことのない私たちは、その時の様子を目にすることなんてできない。これから生まれてくる子供たちは、もっと戦争が遠い存在になってしまう。そんな中で、戦争を恐ろしいと思うことができるだろうか。きっと私のように「自分に戦争は関係ない」と思ってしまう人もいると思う。そうならないために私たちが沖縄戦の話を未来へと繋ぐ必要がある。戦争の悲惨さと命の尊さ。「命どぅ宝」を世界へと広げ平和な世界をつくりあげていくべきなのだと思う。

私たちは、戦争を知り、考えて行動できる。今までは戦争の恐ろしさを知るだけで、何も行動してこなかったかもしれない。しかし、一人が行動することで、誰かの命が助かるかもしれない。それは沖縄戦のことだけでなく紛争や戦争に苦しんでいる人々を救うために大切なことではないだろうか。

これからは、平和だからという理由で「戦争」から目をそむけずに、向き合っていこう。「人種なんて関係ない」「国籍なんて関係ない」と世界のみんなが手を取り合い差別をなくしていくように。戦争で苦しんでいる人に手を差し伸ばすことができるよう、自ら行動してみよう。みんなが笑顔になる平和な世界をつくるために。